

# 高等学校情報科での学びに関する調査結果の経年変化： 麗澤大学2025・2026年度新入生を対象とした 調査を比較して

中園 長新<sup>1,a)</sup>

概要：情報処理学会コンピュータと教育研究会が作成した「高等学校情報科での学びに関する調査アンケート実施項目」に基づき、麗澤大学新入生を対象に実施した2025年度ならびに2026年度調査の結果を分析・比較した。当該大学の新生はほとんどが大学入学共通テストを受験しておらず、情報科が入試科目として位置付けていた学生は少数である。情報科の学習内容理解については、両年度とも十分な理解に至らなかったとする回答が多くを占めた。学びのスタイルについても、年度による差異は見られない。一方で、情報科を履修した感想はおおむね好意的であり、2025年度と比較して2026年度はポジティブ回答の割合が有意に増加し、特に「授業内容は楽しかった」に対するポジティブ回答の増加が顕著であった。少なくとも当該大学の新生においては、学習指導要領の改訂や情報入試の導入による資質・能力の変化は観測できなかったが、これは私立大学全体の傾向である「年内入試」重視の方向性と関連している可能性があり、今後さらなる分析が望まれる。

## Yearly Changes in Survey Results on Learning in High School Informatics: A Comparison of Surveys Targeting Reitaku University Freshmen in the Academic Years 2025 and 2026

NAGAYOSHI NAKAZONO<sup>1,a)</sup>

### 1. はじめに

#### 1.1 研究の動機と背景

2018（平成30）年3月に改訂された高等学校学習指導要領（以降、必要に応じて現行学習指導要領と略記する）[1]では、高等学校共通教科情報科の科目が再編され、それまでの「社会と情報」「情報の科学」からの選択必修から一変して、必修科目「情報Ⅰ」と選択科目「情報Ⅱ」の2科目が設置された。この学習指導要領は2022（令和4）年度高等学校入学学生から学年進行実施となり、2025（令和7）年度以降の大学入学者の「現役生」は、この教育課程を学

んでいることになる。こうした教育課程の変化<sup>\*1</sup>に呼応して、2025（令和7）年1月に実施された大学入学共通テストから教科として「情報」が追加され、情報科は「受験教科」としての側面を併せ持つこととなった[3]。

学校教育における情報教育は、高等学校情報科だけでなく校種・教科等横断的に実施されるものであるが、その中核を担う教科として高等学校情報科は重要な存在である。すなわち、現行学習指導要領で学習した世代は、これまでの教育課程とは異なる情報教育を履修してきたはずである。そうであれば、現行学習指導要領を学んで大学に入学した学生は、これまでの学生とは異なるレベルの情報活用能力を身につけていることが期待される。

<sup>1</sup> 麗澤大学  
Reitaku University,  
2-1-1, Hikarigaoka, Kashiwa, Chiba 277-8686, Japan  
<sup>a)</sup> nnakazon@reitaku-u.ac.jp

<sup>\*1</sup> 本稿では便宜上、2018（平成30）年3月改訂の高等学校学習指導要領に基づく教育課程を現行課程、2009（平成21）年3月改訂の高等学校学習指導要領[2]に基づく教育課程を旧課程と表記する。

しかし、これはあくまでも制度上の話であり、現行学習指導要領で学んだ高校生の資質・能力がどのようになっているかについては、実態調査で明らかにする必要がある。実態調査の方法としては、高等学校卒業時に卒業生に調査したり、大学に入学した新入生に調査したりする方法が考えられるが、本研究では後者の方法を採用する。

大学新入生を対象とした調査として本研究では、情報処理学会 コンピュータと教育研究会 (CE研) が作成した「高等学校情報科での学びに関する調査」アンケート項目を利用した。このアンケート項目は、全国の大学等において共通の質問項目を用意することにより、大学等によらず統一した設問を通して学生の実態を把握することが可能になることを期待して作成・公開するものである。

本研究では、筆者の本務校において 2025・2026 年度の 2 年間にわたり実施したアンケート結果を分析する。なお、2025 年度の結果と分析については、筆者による既発表論文 [4], [5] を援用している。

大学新入生が高等学校情報科を通してどのような学びを経験してきたかを知ることは、高等学校における情報科教育の実態を把握することにつながる。また、高等学校卒業生の進学先の一つである大学においては、新入生の実態を明らかにすることにより、大学初年次教育等で実施されている一般情報教育（たとえば「情報リテラシー」等の情報系入門科目）のあり方を考えるきっかけにもなることが期待される。一般情報教育の具体的な実践のあり方についてはすでに徳野 [6] や白井ら [7] の研究によって検討されているが、これらは旧課程を履修して大学に進学した学生を対象としており、現行課程を履修した学生への対応は今後の検討課題となっている。本研究は、この課題に対しても貢献することが期待される。

## 1.2 研究の目的と意義

本稿では、筆者の本務校である麗澤大学において、2025 年度と 2026 年度の新入生を対象とした調査を実施し、2018 (平成 30) 年改訂の高等学校学習指導要領に基づく教育課程を履修してきた大学新入生における高等学校情報科での学びの実態を把握することを目的とする。その際、教育課程初年度の学年を中心とした 2025 年度大学入学生と、2 年目の学年を中心とした 2026 年度大学入学生のアンケート回答結果を比較検討することにより、高等学校卒業生の情報科に関する資質・能力が年度によってどのように変化しているのか考察することを目指す。

本研究により、現行学習指導要領が高等学校卒業生 (大学新入生) にどのような学びを提供し、それが学習者にどのように受け入れられているかを明らかにすることで、高等学校情報科教育の実情を把握するとともに、卒業生の進学先である大学の初年次教育においてどのような情報教育

が必要であるかを検討するための指針となることが期待される。また、本務校のような小規模私立大学における傾向を検討する上でも、重要なサンプルとなることが期待される。

## 2. アンケート調査

### 2.1 調査対象校の概要

アンケート調査は、筆者の本務校である麗澤大学 (以下、必要に応じて本学と表記する) の学生 (2025 年度・2026 年度新入生) を対象に実施した。

麗澤大学は、千葉県柏市にキャンパスを持つ私立大学であり、外国語学部・国際学部・経済学部・経営学部・工学部の 5 学部からなる。学生数は小規模であり、入学生の定員は 700 名であるが、2025 年度は定員を超える 987 名<sup>\*2</sup>が入学し、2026 年度も 800 名以上の学生が入学している。入学者選抜は、一般選抜に加えて、「年内入試」の推薦入試や総合型選抜等も実施しており [8]、近年は半数以上の学生が「年内入試」で合格し、入学している。

もともと外国語や経済の学部から始まったこともあり、いわゆる「文系」の色が濃い大学であったが、2024 年度に工学部を新設したことにより、小規模ながら文理融合型の総合大学となった。しかしながら教員としての印象では、いずれの学部もコンピュータ等に慣れ親しんでいる学生は少なく、情報・データサイエンス系の授業の中で基本的な内容から丁寧に解説する必要があることも多いと感じる。

卒業後はほとんどの学生が就職等を希望しており、大学院進学者は少数である。

本学新入生が情報教育にどのような意識を持っているかについては、本稿筆者による既発表論文 [9] にまとめている。これは 2024 年度新入生に対する調査であり本稿調査とは対象が異なるが、参考として次のような傾向が見出されている。

- 「情報」を、単なる ICT 活用に留まらず、意味理解やコミュニケーション等を含む広い概念としてとらえている
- 日頃から情報概念に触れており、情報というものについて考える機会が存在している
- 情報に関係する知識等に対して、自らすすんで知ろうとする意欲は高くない
- 高校情報科の学びに対して、パソコンスキル学習という意識が大きい

これらは 2025 年度新入生でもおおむね同様の傾向が見られた [10]。すなわち、本学に入学する学生については、旧課程から新課程への移行において、少なくとも初年度は

<sup>\*2</sup> 2025 年 7 月現在の数値である。出典：麗澤大学「数字で見る麗澤大学」<https://www.reitaku-u.ac.jp/about/data/> (参照 2026-06-03)

大きな変化がなかったことが明らかになっている。

## 2.2 調査の概要

本研究の目的を達成するため、アンケート調査を実施した。アンケート調査の項目は、情報処理学会 コンピュータと教育研究会 (CE 研) が作成した「高等学校情報科での学びに関する調査」アンケート項目 [11], [12] を利用した。実際の調査実施にあたっては、アンケート項目を Google フォームに落とし込み、オンラインで回答できるようにした。なお、2025 年度調査は 2025 年 4 月初版 Ver1 を、2026 年度調査は 2026 年 4 月改訂版 Ver2 を用いているが、設問等は互換性があるため、回答結果を比較検討することが可能である。

このアンケートは、大学における入学生を対象とすることを意図して作成されている。そのため本研究では、著者の本務校である麗澤大学において、1 年次必修科目として設置されている科目「情報リテラシー A」の履修者を対象として調査することとした。当該科目は 1 年次の第 1 クォータ (春semesterの前半) に開講しており、100 分授業 14 回を週 2 回ずつ実施する。入学生全員が履修しており、学部ごとに複数のクラスに分割しているが、学修内容は共通化している。なお、必修科目であるため毎年度一定数の再履修者がいるが、再履修者は専用のクラスを用意しており、新入生クラスでの履修はない。そのため今回の調査では、再履修クラスを除くすべてのクラスを対象とした。これは本学の 2025・2026 年度新入生を対象にしたことと同義である。

調査期間は 2025 年 4 月 16 日～29 日ならびに 2026 年 4 月 15 日～30 日で、これらの期間に実施した当該科目の授業内で実施した。各クラスの授業担当教員が調査の概要や注意点を読み上げ、成績に影響しないことや任意回答であること等を伝えた上で受講生に回答してもらった。なお、回答に際しては名前やメールアドレス等の個人を特定する情報は一切収集していない<sup>\*3</sup>。

本調査は、麗澤大学「人を対象とする研究」に関する倫理細則に基づいて計画・実施した。

## 2.3 回答者の属性

アンケート調査は任意回答としたため、回答率は実施年度や所属学部によってバラツキが生じた。学部ごと、年度ごとの授業履修者数とアンケート回答者数を表 1 に示す。「分類」はアンケート結果を整理する際に用いる学問分野である<sup>\*4</sup>。

<sup>\*3</sup> 調査対象者以外が回答することを防ぐため、Google フォームは大学アカウントでログインしたユーザのみがアクセスできる設定としたが、回答に際してメールアドレス (ログイン情報) の収集を行わない設定としたため、誰が回答したかどうかはわからないようになっている。

<sup>\*4</sup> 配布されているアンケート項目の記載に従い、学部を分類に対応

なお、2026 年度において、所属学部を「経営学部」と回答した回答者が 246 名いたが、当該学部の 2026 年度新入生は 213 名しかいない。すなわち、回答を誤った回答者が一定数いたことが明らかであり、学部ごとの数値が信頼できない。この回答誤りについては、「経営学部」と表記が類似している「経済学部」との取り違えが生じていた可能性が高いと推測し、2026 年度についてのみ「経済学部」と「経営学部」については数値を足し合わせて表 1 に記載した。次年度以降は、回答誤りが生じないようにアンケート項目の表記を工夫したい。

また、本調査は日本の高等学校における情報科での学びを対象としているため、海外の高等学校を卒業した学生については調査対象外となる<sup>\*5</sup>。アンケート回答者のうち、[質問 1] で「海外の高等学校を卒業した」と回答した学生は 2025 年度 19 名、2026 年度 25 名であり、これらを除いた有効回答数は 2025 年度 487 件、2026 年度 629 件であった。本稿では以降、特記なき場合はこれらの有効回答数を各年度回答者の母数として回答割合等を算出している。

また、調査対象者である入学生は、いわゆる現役生と浪人生が混在しており、高等学校において旧課程を履修した者と現行課程を履修した者が混在している。アンケート調査において高校卒業時期を質問したところ、2025 年度においては現行課程にあたる「2025 年 3 月」との回答が 460 件 (94.5%)、それより前に卒業した旧課程相当の回答が 20 件 (4.1%)、無回答 7 件 (1.4%) であった。2026 年度においては現行課程相当が 623 件 (99.0%。内訳は「2026 年 3 月」606 件、「2025 年 3 月」17 件) であり、ほとんどの回答者が現行課程履修者であった。

## 3. 調査の結果

### 3.1 本稿における分析対象

アンケート調査項目は多岐にわたっており、そのすべてを詳細に検討するにはより多くの時間と労力を要する。本稿ではアンケート調査項目のうち、次の項目に絞って調査結果を整理・分析する。

- 大学入学共通テストの受験状況 (質問 7)
- 情報科の履修状況 (質問 8・9)
- 学習内容ごとの理解度 (質問 13～16, 18～21)
- 情報科の学びのスタイル (質問 22)
- 情報科全体に対する印象 (質問 23)

調査結果のうち 2025 年度のものについては、筆者によ

らせている。本稿においてこの分類は使用していないが、今後の研究で他大学等の調査結果と統合して分析する際に必要となるため、ここに記載した。

<sup>\*5</sup> アンケート調査内の「[質問 1] あなたの出身高校の学校区分をお答えください。(単一回答)」で判定し、「海外の高等学校を卒業した」と回答した場合は以降の設問を省略して回答完了となるようにフォームを設定した。

表 1 所属学部および実施年度ごとのアンケート回答率

学部	分類	2025 年度			2026 年度		
		履修者数	回答者数	回答率	履修者数	回答者数	回答率
外国語学部	語学・言語学	287	234	81.5%	254	146	57.5%
国際学部	国際	139	61	43.9%	128	73	57.0%
経済学部	経済・経営・商学	197	125	63.5%	} 391	343	87.7%
経営学部	経済・経営・商学	220	19	8.6%			
工学部	工学	136	47	34.6%	104	67	64.4%
不明		-	1	-	-	0	-
海外の学校を卒業 (*)		-	19	-	-	25	-
計		979	506	51.7%	877	654	74.6%
(*)を除いた計			487			629	

る既発表論文 [4], [5] に記載の内容を参照している。なお、次節以降で引用する質問文については、原則として 2026 年 4 月改訂版 Ver2 のアンケート項目の表記に依った。また、図中では「2025 年度」「2026 年度」をそれぞれ「25」「26」と略記している。

### 3.2 大学入学共通テストの受験状況

「[質問 7] 大学入学共通テストの受験について、当てはまるものを選択してください。(単一選択)」に対する回答件数は表 2 ならびに図 1 の通りであった。なお、図表中の表記と実際の選択肢の対応は次の通りである。

- 共テ受験・情報受験：(2025 年度)「「情報 I」を受験した」「旧情報」を受験した」の合算、(2026 年度)「共通テストを受験し、「情報 I」も受験した」「共通テストを受験し、「旧情報」または「情報関係基礎」も受験した(令和 7 年度まで)」の合算
- 共テ受験・情報なし：(2025 年度)該当する選択肢なし、(2026 年度)「共通テストは受験したが、「情報 I」「旧情報」「情報関係基礎」はいずれも受験しなかった」
- 共テなし：(2025 年度)「受験していない」、(2026 年度)「共通テストを受験していない」

表 2 大学入学共通テストの受験状況(回答数)

	2025 年度	2026 年度
共テ受験・情報受験	67	41
共テ受験・情報なし	-	121
共テなし	420	467

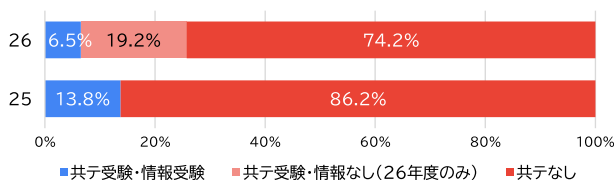


図 1 大学入学共通テストの受験状況(割合)

「情報」の受験者は、2025 年度 67 名(13.8%)、2026 年度 41 名(6.5%)であった。この結果から、本学における新入生はほとんどが共通テストを受験しておらず、受験していても「情報」を受験している者は少数であることが確認できた。

### 3.3 教科「情報」の履修科目と履修時期

高等学校における「情報 I」「情報 II」の履修経験について、質問 8・9 に対する回答結果をまとめたものを表 3 ならびに図 2 に示す\*6。

なお、履修時期は複数回答であり、たとえば 1・2 年次で履修した場合は 1 年次と 2 年次の双方を回答しているため、割合の合計は 100%を超える。「履修したが、受けた時期を覚えていない」「履修したかどうか覚えていない」の回答は合わせて「不明」とした。

表 3 教科「情報」の履修科目と履修時期(回答数)

		2025 年度	2026 年度
情報 I	1 年次	310	406
	2 年次	73	83
	3 年次	60	64
	不明	63	89
	履修していない	39	37
情報 II	1 年次	5	8
	2 年次	19	27
	3 年次	26	40
	不明	106	130
	履修していない	337	433

履修の傾向は、2025 年度と 2026 年度で大きな違いはない。「情報 I」については、6 割以上の回答者が 1 年次に履修したと回答した。「情報 II」については、7 割近い回答者が履修しておらず、開講している高等学校が少ないことを示唆している。

なお、いずれの科目についても、「履修したが、受けた時期を覚えていない」「履修したかどうか覚えていない」との

\*6 アンケート調査項目には、旧課程科目やその他の情報系科目の履修経験を問う設問(質問 10~12)もあるが、本稿では紙幅の関係で分析を省略した。

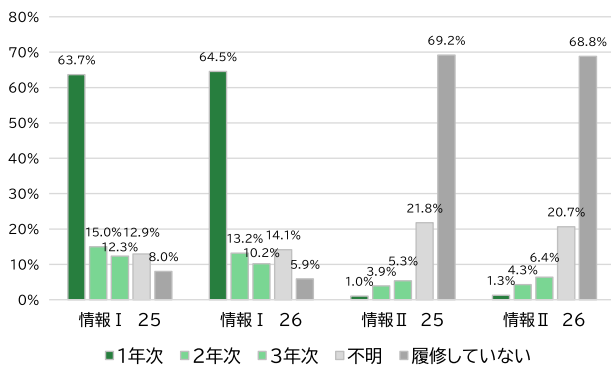


図 2 教科「情報」の履修科目と履修時期（割合）

回答（図表中では「不明」）が1~2割程度あった。これらの回答の真意は不明であるものの、情報科の学びについて科目名が意識されていない状況が推察される。

### 3.4 学習内容ごとの理解度

情報科で学ぶ学習内容ごとに、十分理解しているかを質問した（質問 13~16, 18~21）。学習内容は学習指導要領における「内容」を参考に、「情報社会の問題解決」「コミュニケーションと情報デザイン」「コンピュータとデジタル表現」「アルゴリズムとプログラミング」「モデル化とシミュレーション」「情報通信ネットワーク」「情報システムとデータの管理」「データの活用」の8つに整理し、それぞれ「そう思わない」「あまりそう思わない」「ややそう思う」「そう思う」の4件法で尋ねた。回答結果を表4ならびに図3に示す。

学習内容の理解度については、2025年度・2026年度ともに大きな違いは見られない。回答選択肢の「そう思わない」「あまりそう思わない」「ややそう思う」「そう思う」をそれぞれ1~4で点数化した上で項目ごとに年度間の値を比較し、対応のないt検定を実施した結果を表5に示したが、いずれの項目においても年度間で差があるとは言えなかった。

全体的な傾向としては、両年度とも内容を理解している回答者と理解していない回答者がおおむね半々といったところであるが、「アルゴリズムとプログラミング」「モデル化とシミュレーション」や「情報システムとデータの管理」「データの活用」に関してはいずれの年度もネガティブな回答が6割を超えており、十分な理解に至っていない回答者が多いことが示された。逆に、ポジティブな回答が多かった「情報社会の問題解決」についても、4割を超える回答者がネガティブな回答をしており、情報科の学習内容は回答者にとって全体的に理解が困難なものであったことがうかがえる。

### 3.5 情報科の学びのスタイル

質問 22 では「次の A~E に示す授業スタイルについて、

あなたが受けた教科「情報」の授業ではどのようにされていきましたか。それぞれ当てはまるものを選択してください。」という質問に回答してもらった。設問の下位項目として設定した学びのスタイルは「黒板やスクリーンを用いた先生の説明（教員説明）」「テキストや動画など教材を用いて自分のペースで学習していく活動（自己ペース学習）」「ペアワークやグループワーク、話し合いや教え合い（グループ活動）」「コンピュータを用いた実習（PC実習）」「プレゼンテーションや発表（プレゼン）」の5つである。それぞれの学びのスタイルに対して、「ほぼ毎回あった」「月に数回程度あった」「学期に数回程度あった」「ほとんどなかった」の4択で尋ねた。これらの設問に対する回答結果を表6ならびに図4に示す。

「黒板やスクリーンを用いた先生の説明」や「コンピュータを用いた実習」については、いずれの年度もそれぞれ8割近い回答者が月数回程度以上の実施があったと回答した。一方、「プレゼンテーションや発表」については、いずれの年度も半数を超える回答者が「ほとんどなかった」と回答した。「テキストや動画など教材を用いて自分のペースで学習していく活動」と「ペアワークやグループワーク、話し合いや教え合い」については月数回程度以上とそれ未満の回答がおおむね半数程度ずつであり、学校ごとのバラツキが推測される。

なお、2025年度と2026年度の結果はおおむね似通っているものの、「黒板やスクリーンを用いた先生の説明」「テキストや動画など教材を用いて自分のペースで学習していく活動」「ペアワークやグループワーク、話し合いや教え合い」の3スタイルについては、2026年度のほうが若干ながら実施が増えている様子が見られる。ただし、回答選択肢の「ほぼ毎回あった」「月に数回程度あった」「学期に数回程度あった」「ほとんどなかった」をそれぞれ4~1で点数化した上で年度間の値を比較し、対応のないt検定を実施した結果、いずれの項目においても年度間で有意差は見られなかった（表7）。

### 3.6 情報科を履修した感想

質問 23 では「次の A~D について、教科「情報」を受けた総合的な感想について、それぞれ当てはまるものを選択してください。」という質問で、情報科を履修した総合的な感想として、授業内容の楽しさ、興味、内容理解、難易度についてそれぞれ4件法で質問した。また、2026年度は新設項目として「授業で学んだ内容はこれから役に立つと思う」という質問項目が追加されている。これらの設問に対する回答結果を表8ならびに図5に示す。

いずれの項目についても、ポジティブな回答が半数以上を占めており、「授業内容は楽しかった」「授業内容の難易度は適切だった」についてはおよそ7割の回答者が「そう

表 4 学習内容を十分理解しているか（回答数）

	年度	そう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う
情報社会の問題解決	26	62	221	262	84
	25	58	150	229	50
コミュニケーションと情報デザイン	26	72	247	234	76
	25	60	179	192	56
コンピュータとデジタル表現	26	85	241	234	69
	25	69	181	180	57
アルゴリズムとプログラミング	26	145	262	156	66
	25	119	194	122	52
モデル化とシミュレーション	26	133	277	169	50
	25	120	208	127	32
情報通信ネットワーク	26	96	263	206	64
	25	87	183	169	48
情報システムとデータの管理	26	127	278	168	56
	25	107	196	140	44
データの活用	26	150	258	166	55
	25	114	203	131	39

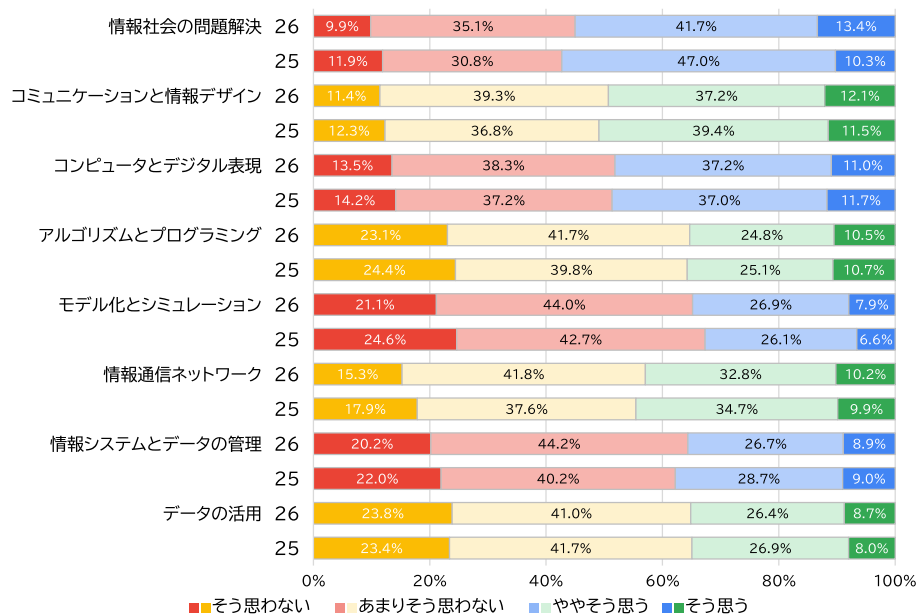


図 3 学習内容を十分理解しているか（割合）

思う」または「ややそう思う」と回答した。

2025 年度に実施していない「授業で学んだ内容はこれから役に立つと思う」を除いた項目に対して、回答選択肢の「そう思わない」「あまりそう思わない」「ややそう思う」「そう思う」をそれぞれ 1~4 で点数化した上で年度間の値を比較し、対応のない t 検定を実施した結果を表 9 に示した。各年度の回答結果を比較すると、2025 年度よりも 2026 年度のほうが、いずれの項目もポジティブ回答の割合が有意に増加している。特に「授業内容は楽しかった」に対するポジティブ回答は、2025 年度の 67.0%から 2026 年度の 78.6%へ 11.6 ポイントも上昇しており、2026 年度の実平均値は 3 を越えている。情報科の授業が学習者にとってより楽しめるものに変容している可能性が示唆された。

## 4. 考察

### 4.1 情報科や情報入試に対する意識・実態

アンケート調査の結果から、本学の新入生は 2025 年度・2026 年度ともに、高等学校における情報科教育や情報入試について積極的には受け止めていなかった傾向が示唆された。

教科の履修状況を問う質問 8・9 に対して、履修時期を覚えていなかったり、科目名を覚えていなかったりする回答者がいずれの年度も 1~2 割程度存在した。回答者の 6 割以上が情報科を 1 年次に履修しているため、すでに遠い過去のことになっているのかもしれないが、情報科の存在が他教科と比較して薄かった可能性もある。

表 5 学習内容の理解度における t 検定 (年度間の比較)

	2025 年度 (n = 487)		2026 年度 (n = 629)		p 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
情報社会の問題解決	2.56	.83	2.59	.84	.572
コミュニケーションと情報デザイン	2.50	.85	2.50	.85	.972
コンピュータとデジタル表現	2.46	.88	2.46	.86	.913
アルゴリズムとプログラミング	2.22	.94	2.23	.92	.892
モデル化とシミュレーション	2.15	.87	2.22	.87	.179
情報通信ネットワーク	2.37	.89	2.38	.86	.807
情報システムとデータの管理	2.25	.90	2.24	.88	.922
データの活用	2.20	.89	2.20	.90	.923

表 6 情報科における学びのスタイル (回答数)

	年度	ほぼ毎回あった	月に数回程度あった	学期に数回程度あった	ほとんどなかった
教員説明	26	401	118	36	74
	25	290	94	28	75
自己ペース学習	26	220	182	85	142
	25	156	143	66	122
グループ活動	26	128	186	93	222
	25	104	121	63	199
PC 実習	26	406	126	44	53
	25	316	103	36	32
プレゼン	26	20	87	195	327
	25	22	63	140	262

この傾向に影響を与えた可能性があるデータとして、本学新入生において大学入学共通テストで「情報 I」を受験した者が少ないことが挙げられる。大学入試センターの発表によると、令和 7 年度大学入学共通テストでは、受験者数 462,066 人に対して「情報 I」受験者数は 279,718 人 [13] であり、令和 8 年度は受験者数 464,090 人に対して「情報 I」受験者数は 305,202 人 [14] であった。全国的には 6 割以上の受験生が「情報 I」を受験していることを考えると、本学新入生の受験率 (2025 年度 13.8%, 2026 年度 6.5%) は非常に低い。

全国と本学の差が生じた原因のひとつとして「年内入試」の比重の高さがあるのではないかと推察される。近年の本学新入生は、その多くが「年内入試」で合格した者であり、その割合は年々増加傾向にある。年内に進学先を確定した受験生であっても共通テストを受験することはあるが、本学新入生は共通テストそのものを受験しなかったか、あるいは受験したとしても「情報」を受けることなく帰宅<sup>\*7</sup>した可能性がある。本学の「共通テスト利用入試」では教科の選択肢のひとつとして「情報」の点数も活用できるため、この入試で受験する場合は共通テストの「情報 I」を受験する動機づけになるはずだが、同形式の入試を受験した場合であっても、「情報」ではなく他教科の点数で挑戦した学生が多いことが推察される。

<sup>\*7</sup> 2 日間にわたる共通テストにおいて、「情報」の試験は 2 日目の最終コマであった。推測の域を出ないが、2 日間の受験で疲弊した受験生が、自身の入試に直結しないのであれば最終コマの受験を回避することも十分に考えられる。

情報入試に対する意識については、新入生が受験した入試方式や共通テストの受験有無、あるいは同様の入試方式を採用している他大学との比較等が必要になる。本稿執筆時点では、他大学におけるアンケート調査結果が少しずつ公開されている段階であり、今後ある程度のデータが集まったら大学横断的な調査をする必要があるだろう。

現段階では検討が不十分な点が残されているものの、こうした状況を踏まえると、本学 2025 年度・2026 年度新入生にとって、情報科が受験教科であるという意識は希薄であったと考えられる。この結論は、情報入試が情報教育に影響を与えていないことを示唆するものではない。本学新入生はそもそも情報科を受験教科として意識していないため、影響の有無を議論できないという意味である。しかしながら見方を変えれば本研究は、情報入試導入の 1 年目・2 年目のいずれにおいても、情報入試の影響を受けずに大学進学する層が一定数いることを明らかにしたとも言える。高等学校の教育課程が現行課程に移行し、情報入試が導入されたからと言っても、(少なくとも本学の) 大学新入生の資質・能力は大きく変容したわけではないことが示唆された。

#### 4.2 情報科の学習内容理解

情報科の学習内容理解については、分野による差が見られた。「情報社会の問題解決」や「コミュニケーションと情報デザイン」等については、半数以上の回答者が「学修内容を十分理解しているか」との質問に対して「そう思う」

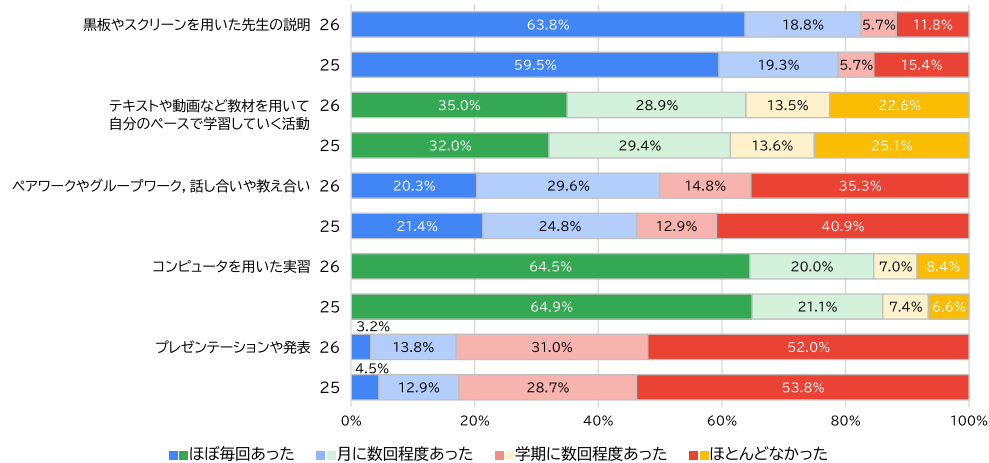


図 4 情報科における学びのスタイル (割合)

表 7 情報科における学びのスタイルにおける t 検定 (年度間の比較)

	2025 年度 (n = 487)		2026 年度 (n = 629)		p 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
黒板やスクリーンを用いた先生の説明	3.23	1.10	3.34	1.02	.072
テキストや動画など教材を用いて自分のペースで学習していく活動	2.68	1.17	2.76	1.15	.257
ペアワークやグループワーク, 話し合いや教え合い	2.27	1.20	2.35	1.16	.244
コンピュータを用いた実習	3.44	.89	3.41	.94	.511
プレゼンテーションや発表	1.68	.87	1.68	.83	.995

または「ややそう思う」と回答している。一方で、「モデル化とシミュレーション」や「データの活用」等については逆に、6割を超える回答者が「そう思わない」または「あまりそう思わない」と回答しており、主観的なレベルにおいて理解度のバランスが取れていないことが明らかになった。この傾向は2025年度と2026年度でおおむね同様であり、有意差があるとは言えない。

Studyplus トレンド研究所が2024年11月に実施した調査 [15] においても、「情報 I」の授業の中で難しいと感じる学びの内容として「プログラミング」「アルゴリズムの理解」「データ分析の手法」が上位にあがっていることから、こうしたバランスの悪さは本学に特有の傾向ではなく、全国的な傾向であると考えられる。このことについては今後の研究において、複数大学の調査結果を横断的に検討することで考察したい。

### 4.3 情報科の学びのスタイルにおける特徴

情報科の学びのスタイルにおいては、2025年度・2026年度で大きな変化は見られないものの、全体としてはいくつかの傾向が読み取れる。

黒板やスクリーンを用いた先生の説明（教員説明）についてはいずれの年度も6割前後の回答者が「ほぼ毎回あった」と回答しており、情報科においては旧来からの講義形式による、教え込みの授業が多く行われていることが示唆された。一方で、1~2割程度の回答者はそのようなスタイル

が学期に数回程度もしくはそれ以下の頻度であったと回答しており、講義形式からの脱却を企図した実践も行われているものと推察される\*8。

テキストや動画など教材を用いて自分のペースで学習していく活動（自己ペース学習）についても、月に数回程度以上あったとする回答がいずれの年度も6割以上を占めている。具体的な実践内容はアンケート結果からは読み取れないが、学習者自身が自分のペースで学ぶことと情報科の学習は親和性が高いことが期待される結果といえよう。

その一方で、ペアワークやグループワーク、話し合いや教え合い（グループ活動）を月に数回程度以上あったとする回答は、5割弱まで減少する。自己ペース学習は実践されているものの、その学習成果が共有される機会はあまり多くないことが考えられる。グループ活動がほとんどなかったとする回答も3~4割と高く、情報科の学びのスタイルとしてグループ活動の実践事例は少ないことが読み取れる。

コンピュータを用いた実習（PC実習）については、8割以上の回答者が月に数回程度以上あったと回答している。情報科の学び（情報活用能力の育成）で扱う「情報」は、コンピュータ等のICTに限ったものではなく、幅広いメディアを活用してさまざまな「情報」を扱うべきである。しかし、情報化が高度に進化した現代において、情報科の学び

\*8 ただし、具体的にどのような授業実践が行われたのかについては、本調査からはうかがい知ることはできない。

表 8 情報科を履修した感想 (回答数)

	年度	そう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う
授業内容は楽しかった	26	44	91	279	215
	25	57	104	199	127
授業内容に興味を持った	26	44	155	264	166
	25	73	122	192	100
授業内容を理解できた	26	66	183	257	123
	25	58	163	205	61
授業内容の難易度は適切だった	26	37	130	296	166
	25	44	119	224	100
授業で学んだ内容はこれから役に立つと思う	26	15	46	232	336
	25			(設問なし)	

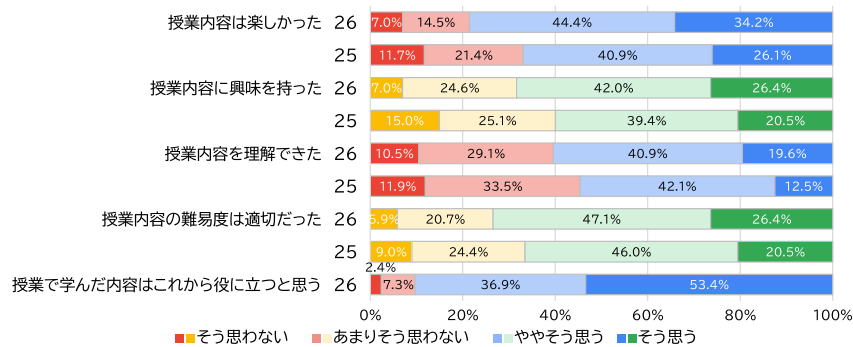


図 5 情報科を履修した感想 (割合)

のツールとしてコンピュータの占める割合は非常に高いのは必然のことと考えられる。

学びのスタイルの中で、もっとも実践が少ないのがプレゼンテーションや発表（プレゼン）である。月に数回程度以上あったとする回答はいずれの年度も約 17%にとどまり、半数以上の回答者がほとんどなかったと回答している。なお、情報科の必修科目である「情報 I」には、コミュニケーションを扱う学習内容が含まれており、プレゼンテーションが必須というわけではないものの、何らかの形で情報を活用したコミュニケーションを扱う必要があり、プレゼンテーションを実践する下地は整っていると考えられる。そうした状況でプレゼンテーションの実践が少ないという現状は、情報科の学びのスタイルを見直しあるいは改善する余地があることの証左とも捉えることができる。

学びのスタイル全体の傾向を俯瞰すると、「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業実践は、現段階ではまだ十分ではないという現状が推察できる。もちろん、「主体的・対話的で深い学び」は教育方法ではなく学びの総体的な姿である<sup>\*9</sup>から、学びのスタイルだけをもってその是非を判断することはできない。本調査の結果はあくまでも、教育方法（学びのスタイル）という一面を切り取った状態から問題提起するものであり、情報科の実践と主体的・対話的

\*9 例として極論を言えば、教育方法が教員の一方的な講義であっても、その中で学習者が主体性を持って対話的に深く学ぶことができるのであれば、それは「主体的・対話的で深い学び」が実現されているといえる。

で深い学びの関係については、より多面的な視点で考察が必要であろう。この点については本研究で扱っている調査の範疇を超えるため、今後の課題としたい。

#### 4.4 情報科の履修に対する印象

学習内容理解という点では困難さが否めない情報科教育であるが、その反面、教科の履修に対する印象はおおむね肯定的であった。

2025 年度・2026 年度ともに、情報科の授業内容について「楽しかった」「興味を持った」「理解できた」「難易度は適切だった」のいずれに対しても半数以上がポジティブな回答をしている。「難易度は適切だった」と考える回答者が多い一方で、4.2 節で触れたとおり、学習内容理解はそこまでポジティブな回答は得られておらず、一見すると矛盾しているようにも見える。あくまで推察の域を出ないが、本学新入生にとって情報科の学びは、難しいとは感じられないが理解するほどの定着には至っていないという状態であろう。すなわち、学び自体に困難は感じていないものの、理解を深めるレベルの学びには到達していない、あるいはそもそも理解しようと思っていない可能性がある。

先述した Studyplus トrend 研究所の調査 [15] では、その報告タイトルに「学校の授業は高校生の 7 割が「難しい」6 割が「楽しくない」とある通り、多くの高校生が情報科の学びを「難しい」「楽しくない」と捉えていることが示されている。一方で、本研究における調査・分析では、本

表 9 情報科を履修した感想における t 検定 (年度間の比較)

	2025 年度 (n = 487)		2026 年度 (n = 629)		p 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
授業内容は楽しかった	2.81	.95	3.06	.87	.000**
授業内容に興味を持った	2.66	.97	2.88	.88	.000**
授業内容を理解できた	2.55	.86	2.69	.90	.008**
授業内容の難易度は適切だった	2.78	.87	2.94	.84	.002**

(\*\* p < .01)

学の新入生は情報科の授業を「難易度は適切だった」「楽しかった」と振り返っており、この差異が調査時期によるものか、調査対象の違いによるものか、あるいは本学の新入生が Studyplus トレンド研究所の調査母集団とは異なる傾向を持つ集団であるのか、詳細を明らかにするには情報が不足している。また、情報科の学びを楽しい、興味深いと感じている状態でありながら学びを深められていない原因も、今回の調査からは明らかにすることはできない。しかし、学びに向かうポテンシャルは持っているため、適切な働きかけを行うことで、情報科の学びにより深く向き合う可能性はあるだろう。具体的な方策等については本稿の範疇を超えるためここでは議論しないが、働きかけ次第では、情報教育に対する意識が変容することも期待される。

## 5. おわりに

本研究では、情報処理学会コンピュータと教育研究会が作成した「高等学校情報科での学びに関する調査アンケート実施項目」に基づき、麗澤大学 2025 年度・2026 年度新入生を対象としたアンケート調査を行った。調査結果を分析・考察し、各年度の結果を比較検討することで、いくつか傾向が見出された。

本学新入生は全国的な傾向とは異なり、大学入学共通テストで「情報」を受験した者は少なく、情報入試の影響は見出せなかった。このことは「年内入試」で定員の多くを確保する私立大学の入試戦略が影響している可能性があるが、現段階で具体的な関連は不明である。なお、「年内入試」を重視する傾向は本学に限らず、私立大学全体の傾向と言える [16]。文部科学省が取りまとめた令和 7 年度国公私立大学入学者選抜実施状況 [17] によると、令和 7 年度は私立大学入学者の 22.8% が総合型選抜、38.8% が学校推薦型選抜で入学しており、これらはおおむね年内入試として実施されるから、私立大学入学者の 6 割近くが年内入試で入学を決めている計算になる。このような状況において、情報入試が大学入学者の資質・能力にどのような影響を与えるのか、あるいは与えないのかについては、今後も慎重に調査を続ける必要があるだろう。

また、情報科の履修科目・時期を問う質問では、わからない・覚えていないという回答が一定数あり、多くの回答者にとって、情報科の存在が他教科と比較して薄かった可

能性がある。学習内容の理解についてはおおむね半数程度の回答者が理解している傾向が見られたが、分野による差も明らかになった。一方で、情報科の履修に対する印象としてはおおむね好意的であり、今後はこのポテンシャルを元に、情報科の深い学びにいかに関与していくかを検討する必要がある。

本調査は、筆者の本務校である麗澤大学の 2025 年度・2026 年度新入生のみを対象とした。当然ながら、本調査結果は大学の特性等のバイアスを受けており、本稿における考察を直ちに一般化することはできない。今後は様々な大学等で実施された調査結果を統合して横断的に分析し、現行学習指導要領における学習者が、情報科でどのような学びを行い、何を得たのかについて一般的な傾向を見出したり、あるいは特徴ごとに分類したりしていくことが求められる。今後は本学でのより詳細な調査を実施するとともに、同様の調査を実施している大学等と連携し、調査ならびに研究を進展させていく予定である。

謝辞 調査にご協力いただきました、麗澤大学「情報リテラシー A」担当教員ならびに受講生のみなさまに感謝いたします。本研究の調査は、情報処理学会 コンピュータと教育研究会が作成したアンケート項目 (2025 年 4 月初版 Ver1 ならびに 2026 年 4 月改訂版 Ver2) を使用して実施しました。 <https://ce.eplang.jp/index.php?InformaticsSurvey>

本研究は、JSPS 科研費 JP21K02864 ならびに 25K06475 の助成を受けたものです。

## 参考文献

- [1] 文部科学省：高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示)，東山書房 (2018 [出版 2019])。
- [2] 文部科学省：高等学校学習指導要領，東山書房 (2009)。
- [3] 大学入試センター：平成 30 年告示 高等学校学習指導要領に対応した令和 7 年度大学入学共通テストからの出題教科・科目について，独立行政法人大学入試センター (オンライン)，入手先 (<https://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?d=743&f=abm00000301.pdf>) (参照 2026-06-03)。
- [4] 中園長新：高等学校情報科での学びに関する調査結果と考察：麗澤大学 2025 年度新入生を対象とした調査，情報処理学会研究報告 コンピュータと教育 (CE)，Vol. 2025-CE-180，No. 9，pp. 1-10 (2025)。
- [5] 中園長新：大学新入生が経験してきた高等学校情報科の学びのスタイル：麗澤大学 2025 年度新入生を対象とした

- 調査・統報, 情報処理学会研究報告 コンピュータと教育 (CE), Vol. 2025-CE-181, No. 6, pp. 1-8 (2025).
- [6] 徳野淳子: 大学新入生の情報分野の知識・技能の習得状況に関する4年間の調査, 福井県立大学論集, No. 61, pp. 55-67 (2024).
- [7] 白井詩沙香, 松浦敏雄, 中西通雄, 竹村治雄, 清川 清, 長瀧寛之, 浦西友樹: 大阪大学における一般情報教育の変遷と今後の展望, 学術情報処理研究, Vol. 29, No. 1, pp. 81-88 (2025).
- [8] 麗澤大学: 麗澤大学年報 2024, 麗澤大学 (2025).
- [9] 中園長新: ICT活用と情報教育に対する大学新入生の意識と実態, 大学ICT推進協議会 2024年度年次大会論文集, pp. 63-70 (2024).
- [10] 中園長新: 情報教育に対する大学新入生の意識は変化したのか: 2024・2025年度新入生アンケート結果比較, 大学ICT推進協議会 2025年度年次大会論文集, pp. 470-477 (2025).
- [11] 情報処理学会コンピュータと教育研究会: 高等学校情報科での学びに関する調査アンケート実施項目の提供について, 情報処理学会コンピュータと教育研究会(オンライン), 入手先 (<https://ce.eplang.jp/index.php?InformaticsSurvey>) (参照 2026-06-03).
- [12] 越智 徹, 白井詩沙香, 中園長新, 長瀧寛之: 「高等学校情報科での学びに関する調査アンケート」の開発, 情報処理, Vol. 66, No. 12, pp. 550-554 (2025).
- [13] 大学入試センター: 令和7年度大学入学共通テスト実施結果の概要, 独立行政法人大学入試センター(オンライン), 入手先 (<https://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?d=733&f=abm00005261.pdf>) (参照 2026-06-03).
- [14] 大学入試センター: 令和8年度大学入学共通テスト実施結果の概要, 独立行政法人大学入試センター(オンライン), 入手先 (<https://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?d=2126&f=abm00006108.pdf>) (参照 2026-06-03).
- [15] Studyplus トレンド研究所: 【高校生 1,673名対象】共通テスト新科目「情報Ⅰ」の授業・入試活用実態を調査～高3生の78.8%が今年の入試で利用予定も, 学校の授業は高校生の7割が「難しい」6割が「楽しくない」～, Studyplus トレンド研究所(オンライン), 入手先 (<https://www.trend-lab.studyplus.jp/post/20241212>) (参照 2026-06-03).
- [16] 後藤健夫: 大学入試は「年内合格続々」, 東洋大が広げた波紋, 東洋経済オンライン(オンライン), 入手先 (<https://toyokeizai.net/articles/-/839430>) (参照 2026-06-03).
- [17] 文部科学省: 令和7年度国公立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要, 文部科学省(オンライン), 入手先 ([https://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/2020/1414952\\_00009.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/2020/1414952_00009.html)) (参照 2026-06-03).